

第 24 回 再びドイツへ 神聖ローマ帝国とは？

— 前篇 ドイツ、バイエルン州の旅 —

現在われわれが恩恵を受けている医療において定着しているグローバルな倫理観は、ギリシャ・ローマ時代の聖医のひとりとされるヒポクラテスにその源流がある。しかしながらそれが、歴史的に中世の象徴でもある神聖ローマ帝国という社会のなかでどのようにして育まれてきたかに関して、筆者にとっての最近の関心事のひとつになっていた。

そこで筆者は、とくに神聖ローマ帝国に関係したところをみて多少ともその雰囲気を感じてみたいという希望をもって、昨年が続いて今年も 6 月、10 日間ほどの日程でドイツを訪れた。2 年前からハイデルベルク大学で研究員生活を送っている二男のいるところを起点とし、ドイツ国内はすべて鉄道を利用し、主としてドイツ南部のハイデルベルクのあるバーデン・ヴュルテンベルク州に隣接したバイエルン州内を移動した。

最初に訪れたのはバイエルン州フランケン地方の中心都市ヴュルツブルクであった。この地は 7 世紀フランク王国の諸侯領となり、その初期にキリスト教修道士キリアンが領主法廷で殉教したところである。かつて江戸時代の我が国に西洋医学や生物学を伝えた博物学者シーボルトはヴュルツブルク大学で学び、X線を発見して 1901 年第 1 回ノーベル賞受賞者であるレントゲンはヴュルツブルク大学の物理学教授であった。城塞都市の旧市街から眺めると、メイン川をはさんで対岸の丘の上に歴代司教によって世俗権力を維持するために造営強化改築されたというマリーエンベルグ(マリアの丘)要塞がそびえていた。市内には 18 世紀 7 代の司教によって完成し、ヨーロッパで最も美しい司祭館といわれる巨大な宮殿レジデンツや、ドイツを代表するロマネスク建築の大聖堂などがあった。ユネスコ世界文化遺産となっているレジデンツの中は中世の芸術にあふれ、階段の間では天井のフレスコ画には従者を伴った技芸の神アポロンを中心にしてその四隅には世界の四大陸の様子がそれぞれの民族ごとの特徴を示して描かれていた。旧市街中心部にあるドイツ 4 番目の規模の基本的にロマネスク様式の教会の大聖堂(ドーム)には歴代司教の栄華を偲ばせる墓碑があり、中世ドイツの著名な彫刻家リーメンシュナイダー(1460 年頃-1531 年)の傑作といわれる彫像もみることが出来た。ヴュルツブルクは神聖ローマ国内で最大のワイン産地であり、フランケンワインとして知られている。余談だが、17 世紀ベスト流行時に当時の感染者が予想をはるかに下回ったのはワインの飲用のためといわれるほど医薬品として評価され、別名クランケンワインもいわれる。

ヴュルツブルクから列車で約 50 分のところのバンベルグは、ドイツロマンチック街道(ヴュルツブルクからヒュッセンまでの 366km の観光街道。ローマへの巡礼の道という意味もある)から外れているが、11 世紀初頭に皇帝ハインリッヒ II 世が首都化のため司教座(大司教の都市)を創設したというドイツで最も美しい人口 20 万人の古都である。かつてドイツの飛行機王といわれたメッサーシュミット氏の邸宅に改造した同名のホテルに投宿した。第二次世界大戦末期にドイツ空軍の最終兵器として登場したメッサーシュミット Me262 は、実戦に使用された史上最初のジェット戦闘機である。バンベルグは歴史上多くの戦火に見舞われたものの大きな被害を受けず、とくに第二次世界大戦中は連合軍の空爆を免れることができたため、旧市街の大半が中世千年のたたずまいを残し、1993 年旧市街全体がユネスコ世界文化遺産に登録された。高台から眺めると聖堂、教会、宮殿、博物館などの建物を囲んで、まち全体の建物の屋根がオレンジ色調で統一されているようにみえたのが印象的であった。旧市街にはレグニッツ川が流れ、その中州にかつて都市貴族ガイア一家の所有から司教座の本山である聖堂ドームの所有となって、18 世紀初頭まで司教兼君主達のレジデンスとして使われていたシュロス(城)ガイアーシュヴェルトがある。バンベルグで最も印象的であったのは旧市庁舎が人口の中州に建てられていたことであった。それは「インゼル・ラートハウス(島の市庁舎)」ともいわれ、その存在はすでに 1386 年頃に記載されている。この旧市庁舎に関しては、市民達が彼等の住む島地区と領主司教連管轄の丘地区との境界として、当時市民が獲得した参政権を示威するために中州に建てた、という伝説がある。筆者は旧市庁舎を忘れがたく、バンベルグを離れる三日目の朝も再度訪れた。バンベルグは中世魔女狩りの中心地のひとつであったことも知られ、17 世紀前半大司教の指導のもとに大規模な魔女狩りで 300 人が薪の上で焼かれたという。1628 年には市長も魔術師監獄で拷問を受けて死亡した。この街でしか飲めないという燻製ビール(ラオホ・ビーア)があったが、筆者には焦げた燻製のような独特な味がした。

バンベルグから 1 時間足らずで、ミュンヘンに次ぐバイエルン州第二の 50 万都ニュルンベルクを日帰りした。この度の訪独では、医学倫理を考えるうえで神聖ローマ帝国とともにニュルンベルク綱領発祥の地としても当地訪問を期待していたのである。ニュルンベルク綱領には、第二次世界大戦終結 2 年後の 1947 年ナチス・ドイツによる戦争中のユダヤ人虐殺や人体実験などが倫理や社会規範に背くこととして裁かれた結果、研究目的の人体実験を行うに当たってのガイドラインとしての 10 項目の基本原則が含まれている。綱領には医学研究に当たって被験者の意思と自由が尊重され保護されなければならないことが示されている。ニュルンベルク駅の地下道を抜けるとすぐこの城塞都市の城門(ケーニヒ門)があった。旧市内では 13 世紀から 2 世紀を費やして建立されたという聖ロレンツ教会(現在プロテスタント教会)や、教会楼塔に金印勅書公布(1356 年)をもとに 1509 年に作られたドイツ最古の仕掛け時計(その日 12 時に実際に動くのを見た)のある聖母教会、さらに 11 世紀に建立されたというこの街最古の聖セバルドス教会などを見て回った。聖セバルドス教会には 14 世紀に行われたユダヤ人追放と虐殺の記録や、ナチス・ドイツ時代の世界大戦戦火で徹底的

に破壊された旧市街の写真などが展示されていた。ナチス・ドイツ時代には 1935 年ニュルンベルク法といわれる「ユダヤ人から市民権を剥奪する法」(ドイツ人の血と尊厳の保護のための法律)がナチス党大会で定められているが、これらの記録があるとされる歴史資料館やゲルマン民族資料館には日帰りであったため時間がなく行けなかった。11 世紀に築城され、皇帝の拠点として神聖ローマ帝国で重きをなしたニュルンベルク城はこの城塞都市の北側にあり、それほど高くない城山にのぼると、眼下にはかつて戦火で徹底的に破壊され、その後元通りに修復されたという美しい市街が一望された。街の修復作業は現在も続いている。

バンベルグからロマンチック街道沿いにあるローテンブルク(正確には Rothenburg ob der Tauber; タウバー川上方にあるローテンブルク)に移動した。ローテンブルクは、970 年頃この地の豪族がタウバー溪谷の高台に初めて城塞を築いたとされるように、高台にある城塞都市である。第二次大戦終戦の二日前に米軍による誤爆で街の 40%が破壊されたが、戦後修復されて、現在人口 11,000 余り、そのうち城壁内には 4,000 人程度の住民が住むドイツ有数の観光都市である。筆者らが二泊したホテルは文字通り城壁内にあり、城壁を利用した地下にはワインセラーや書庫やピアノなどが備わった娯楽室があった。城壁は、内側に作られた小高いところの道を通って 2 時間足らずで一周できるようなものだったが、城内の住居が近々と目に迫り、城壁の所々にあけられた銃眼から城外の様子が垣間見え、台座用にやや広がっている土間には中世を彷彿させるような大砲が砲門を外に向けていた。ローテンブルクは 13 世紀帝国自由都市となり、その後帝国からの自由独立と刑事裁判権なども獲得したが、その後都市同盟の解体や宗教改革、さらに 30 年戦争などの影響を強く蒙り、衰退の道をたどった。この市は 17 世紀後半から数百年間発展から取り残された静かな田舎町であったが、19 世紀になって中世のたた住まいを残す観光地として注目されるようになった。

ローテンブルクでは 1311 年に始まり 1485 年献堂式がおこなわれたという街の主教会聖ヤコブ教会を訪れた。祭壇にはリーメンシュナイダーの彫刻作品を組み合わせた「聖血祭壇」があった。これには「キリストの最後の晩餐」「キリストのエルサレム入城」「オリーブ山の場面」等が筆者にもわかるように克明に描かれていた。リーメンシュナイダーの作品を組み合わせたのがローテンブルクの芸術家エルハルド・ハルシュナーといわれる。帝国都市博物館は、始めはドミニコ修道尼院として 1258 年に建築されたといわれ、中にはローテンブルクの 10 万年前からの生活史資料が展示されていた。この街が 1631 年スウェーデン軍の侵攻によって焼かれそうになったとき、当時の市長ヌッシュがワインを一気に飲み干すことと引き替えに焼き討ちから免れることが出来たという、2 リットルほどの容量のワインジョッキも展示されていた。また、13 世紀から 15 世紀におけるユダヤ人虐殺の資料があった。犯罪博物館には、魔女狩りや刑罰や十字軍遠征時の銃後女子用貞操帯などが展示されていた。

最終日はハイデルベルクに一泊し、翌日フランクフルト空港から帰国の途についた。

(後編「神聖ローマ帝国と医学」に続く)